



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	札幌医科大学「地域医療合同セミナー」における医療職種理解のためのフォトボイスの活用
Author(s)	道信, 良子; 澤田, いずみ; 今野, 美紀; 田野, 英里香; 石川, 朗; 石井, 貴男; 高橋, 由美子; 寺田, 豊; 三瀬, 敬治
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要,第 12 号: 45-50
Issue Date	2010 年
DOI	10.15114/bshs.12.45
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6359
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n134491921245.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

札幌医科大学「地域医療合同セミナー I」における 医療職種理解のためのフォトボイスの活用

道信良子¹⁾、澤田いずみ²⁾、今野美紀²⁾、田野英里香²⁾、石川 朗³⁾、
石井貴男⁴⁾、高橋由美子⁵⁾、寺田 豊⁵⁾、三瀬敬治⁶⁾

1) 札幌医科大学医療人育成センター教養教育研究部門

2) 札幌医科大学保健医療学部看護学科

3) 札幌医科大学保健医療学部理学療法学科

4) 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

5) 札幌医科大学医学部地域医療総合医学講座

6) 札幌医科大学医療人育成センター入学者選抜企画研究部門

筆者らは、札幌医科大学において2008年度に新設された医学部・保健医療学部共通科目「地域医療合同セミナーI」に、フォトボイス (photovoice) という方法論を応用し、学生の医療職種理解を促す教育を行った。フォトボイスは、写真という表象手段を用いて、地域社会を深く理解し、よりよく変化させていくことを目的とするフィールドワークの方法論である。学生は大学附属病院でフォトボイスを行い、医師、看護師、理学療法士、作業療法士、助産師の職務を探究した。この活動の結果、フォトボイスを地域医療教育に活用していく意義として、(1) 地域医療の現場の実体験、(2) 地域医療に対する新しい知見獲得の可能性を育成する視覚を通じた思考、(3) 地域の医療者および受療者の目線で健康や医療について考えていく能力の育成があげられた。

<キーワード> フォトボイス、医療職種理解、地域医療教育、質的研究

On the use of photovoice for understanding health occupations in the first-year experience of the residential community internship program at Sapporo Medical University

Authors: Ryoko MICHINOBU¹⁾, Izumi SAWADA²⁾, Miki KONNO²⁾, Erika TANO²⁾, Akira ISHIKAWA³⁾,
Takao ISHII⁴⁾, Yumiko TAKAHASHI⁵⁾, Yutaka TERADA⁵⁾, Keiji MISE⁶⁾

1) Sapporo Medical University, Center for Medical Education, Department of Liberal Arts and Sciences

2) Sapporo Medical University, School of Health Sciences, Department of Nursing

3) Sapporo Medical University, School of Health Sciences, Department of Physical Therapy

4) Sapporo Medical University, School of Health Sciences, Department of Occupational Therapy

5) Sapporo Medical University, School of Medicine, Department of Community and General Medicine

6) Sapporo Medical University, Center for Medical Education, Department of Admissions

Abstract: The authors applied "photovoice," a community-based qualitative methodology, to an activity aimed at promoting students' understanding of health occupations in the first-year experience of the community internship program for medical and health sciences students at Sapporo Medical University (SMU), called "the residential community internship program." In this seminar, photovoice was defined as a fieldwork method aiming at a deep understanding and improvement of the community through photographic representation. The students used the photovoice method to explore the duties of medical doctors, nurses, physical and occupational therapists and midwives at the university-affiliated hospital. We found that the use of the photovoice method in the community internship program provided (1) actual experience of health care, (2) a visually-aided thinking process that cultivates the potential to develop a new ideas on community health, and (3) the development of competency to think about health and medicine from the perspectives of the persons who are actually engaged in community health services.

Keywords : photovoice, understanding of health occupations, community health education, qualitative study

Bull. Sch. Hlth. Sci. Sapporo Med. Univ. 12:45-50 (2010)

はじめに

札幌医科大学では、医学部と保健医療学部の共通科目「地域医療合同セミナーⅠ」を2008年度に新設開講した。本科目は、地域に滞在して行う実習やチーム体験のための実習を拡充するために、学部教育として一貫性を持って、その基盤となる知識・関心を高めることを目的としている。具体的には、地域医療を展開するために必要となる「基本的知識の獲得」と「パートナーシップ力の形成」という2本の柱に、主体的な学習態度を育成するためのさまざまな学びの方法論を組み合わせた教育である¹⁾。その方法論の1つが「フォトボイスphotovoice」である。本稿では、フォトボイスの理論的背景を整理し、これを地域医療の医療職種理解に応用した経緯とこれまでの成果をまとめ、地域医療教育にフォトボイスを活用していくことの意義を述べる。

フォトボイスの理論的背景

フォトボイス (photovoice)

フォトボイス (photovoice) を提唱した公衆衛生学者のCaroline Wangによると、フォトボイスは「ある特定の写真の技術を用いて、地域住民が自分たちの地域を理解し、表象し、その価値を高めるプロセス」と定義される²⁾。ある特定の写真の技術とは、撮影の技術という意味ではなく、これまでにない新しい知見を導くような知の生産の技術のことをいう。具体的には、地域住民が自らカメラを持ち、自分たちの毎日の暮らしに密着し、さまざまな角度から地域の暮らしのありようを写真に収めていく。撮影された写真には「ボイス=撮影者の意図をあらわすことば」を付け、フォトボイスに参加した住民全員でその写真とボイスについて討議する。住民はこの一連の作業のなかで地域の課題を明確にするだけでなく、地域の強みを発見し、地域の価値を高めていく²⁾。

筆者らはフォトボイスを地域医療合同セミナーⅠに応用するにあたり、フォトボイスを「写真という表象手段を用いて、地域社会を深く理解し、よりよく変化させていくことを目的とするフィールドワークの方法論」と定義した。フィールドワークは文化人類学の学問領域で発達した方法論であり、地域のなかで人びとの暮らしの全体を質的に記録する作業である。その記録の主体が住民自身であり、記録する媒体が写真であるところに、フォトボイスの独自性がある。さらに、通常のフィールドワークは記録そのものに意味があるが、フォトボイスは記録を通じて地域の課題を特定しそれを解決することによって地域の価値を高めることに意義がある。

筆者らはフォトボイスを地域医療合同セミナーⅠに応用し、将来自分自身がその一員となる地域医療の場の理解を学生に促し、医療職について深く学ばせることを目的とし

た。本科目では、地域医療の変化までは学習目標に入らない。しかし、専門教育が始まる前のこの時期にフォトボイスを体験することで得た学びは、将来にわたる地域医療への建設的なまなざしを育成するものと考えた。なお、本科目では「地域医療」を地域で提供される地域住民のための医療と定義し、その内容は病気予防から治療・リハビリテーションまでを広く包括するものと捉えている。

フォトボイスが促す思考—標準化されない、環境のなかの思考

ここでは、医療職種理解にフォトボイスを応用した理由について、フォトボイスの思考の独自性から論じておく。筆者の1人(筆頭著者)はフォトボイスの思考を「標準化されない、環境のなかの思考」と名付けた。なお、ここでの議論はフォトボイスを本セミナーに応用していくなかで筆者らが独自に展開したものであり、Wangが論じたものではない。応用する場に応じて方法論の意義や特徴が変化するのは、研究の対象に方法論が規定されるという質的研究法の特徴であり、本科目においてもこれを重視した。

フォトボイスの思考の独自性は、第一に、写真を主たる媒体とするという点で、文字にはない思考のプロセスを有していることである。人間は文字を使うことで、ある一定の標準化された思考の枠組みで物事を考える。とりわけ、標準語や専門用語は、共通性や客観性を重んじるために、人間の生き生きとした多様な思考に開かれていない。より重要なのは、そのような標準化された思考や言語には、自己も他者もない、つまり、だれの主体性もないことである。これとは異なり、文字を十分に習得していない幼い子どもが描く絵、読み書きがあまりできない人が書く手紙、そしてより身近なところでは、日本のさまざまな地域特有のことばは人びとの日常を豊かに表現し、受け手の心を強く揺さぶる。これと同じように、写真を媒体とするフォトボイスは、人間の思考をより自由な領域に開いてくれるものである。筆者らは、地域医療の職種理解にはこのような「標準化されない思考」のプロセスが必須であると考えた。

第二に、フォトボイスは現場から距離をおいて思索するのではなく、現場に自ら出向いてそこで練り広げられている現象を理解しようとする方法論である。フォトボイスでは、医療者の日常の仕事について、学生が自らもその医療現場にいることにより、身体感覚を通じて学び、思考する。つまり、地域医療の場に直接的にかかわることにより、「肌で感じる」ように現象を理解する。このような現場に密着した現象理解は「環境のなかの思考」と呼べるものである。

2008年度地域医療合同セミナーⅠにおける フォトボイスの応用

地域医療合同セミナーの開講初年度には、保健医療学部

と医学部あわせて36名の学生が参加した（医学部15人（特別推薦選抜入学学生8名含む）、看護学科12人、理学療法学科4人、作業療法学科5人）。時間の制約もあり、授業は正規の授業時間外に行われたが、本科目は選択科目として登録されているため、受講すれば卒業単位に本科目の単位を加えることができた。

フォトボイスの手順

学生は、札幌医科大学附属病院（以下、附属病院）をフィールドに、自分の専門を含むさまざまな医療職（医師、看護師、理学療法士、作業療法士、助産師）について探究した。フォトボイスの具体的な手順と内容は表1の通りである。

表1 附属病院におけるフォトボイスの手順とその目的と内容

手順	目的と内容
1. フィールドに親しむ	学生は、探究活動の場に親しむことを目的に、附属病院の見学を行った。見学した部署は、脳神経外科・泌尿器科・産科の各外来、泌尿器科・眼科・麻酔科・小児科の各病棟、さらに、薬剤部、病理部、リハビリセンター、受付、医事センター、ヘリポートなどである。「標準化されない、環境のなかの思考」を育むには、フィールドにおいて、学生が主体的にもの見方を定め、対象を直接的にとらえるような体験を重ねることが必要である。そのため、学生には附属病院の見学の際に自由に写真を撮影し、自らのもの見方を確認させるような学びの機会を与えた。
2. 問題意識を明確にする	学生は、6つのグループに分かれて、自分たちの探究する職種について、何をどのように明らかにしたいのか、問題意識を明確にした。その具体的な手法は、専門教員を交えてのグループ討議、専門教員に対するインタビュー、高大一貫型教育プログラムとして開発されたeラーニングによる学習である。 ³⁾ これらの作業は、フィールドワークの前に行う下調べのようなものであり、課題に対する接近の方法を明らかにすることを目的とした。
3. 写真撮影を計画し実施する	学生は、附属病院中央写真室の職員から、写真撮影の基礎知識として、写真撮影の3要素(ピント・露出・構図)に関する詳細な説明を受けた。フォトボイスでは、「カメラを使いこなすこと」が必須の条件であり、とくに、写真の構図には撮影者の感性や思考があらわれるということを学生が事前に理解しておくことが重要であった。 写真撮影は、12月22日にオリエンテーションをした後、12月24日から26日までの3日間に行った。学生は、いずれかの1日間、探究する職種の担当者に随伴し、職員の働く様子を撮影した。その際に、1グループ(6名)が、2名ずつに分かれ、3ペアとなり、午前8時から午後5時までを3シフトに分け、各シフトに1ペアを配置した。各グループのチューター教員は、活動を行う部署の担当者に事前に連絡を取り、活動の調整を行った。活動の当日はチューターは同行せず、各部署の担当者(1名)に1ペアを随伴させ、担当者から直接学ばせることを重視した。撮影において学生は自分の心と身体のおもむくままに医療の場面を捉えることを重視し、活動の最後に学生はリフレクションノート ⁴⁾ に活動の振り返りを記した。 * リフレクションノートはフィールドワークの振り返りのための手法である。その具体的な内容は「自己省察と自己表現をうながす教育—文化人類学からの多文化医療教育の試み ⁵⁾ 」に詳しい。
4. 結論を導き公表する	学生は、撮影した写真、リフレクションノート、インタビューの資料を持ち寄り、グループワークを行って、探究の問いに対する答えを導いた。グループワークの目的は、協働作用(synergy)から得た洞察にもとづき、写真を通じて伝えたいことを明確にするためである。学生は写真に付けるボイスについて真剣に話し合い、互いに詳細にその内容を確認しあった。チューターもグループワークに参加し、アドバイスをを行った。導かれた結論はパワーポイントにまとめ、最終報告会で発表し、病院の職員や教員からのフィードバックを得た。

倫理的配慮

フォトボイスの実施にあたり、科目担当責任者が、附属病院病院長および看護部長に活動の趣旨と内容について口頭および文書で説明し、協力を要請した。病院内の各部署にも公文書を発送し、活動の趣旨と内容を伝え、医療者が働く様子を撮影することの許可を得た。患者も被写体になる時には、各部署の担当者が、事前に口頭で患者から許可を得た。フォトボイスの結果の公表においては、看護副部長および各部署の責任者からの承諾を得て、被写体となった医療者からの写真掲載許可を得た。患者も被写体になっている場合には、患者または患者の家族からの承諾を得た。

2008年度地域医療合同セミナーⅠにおける フォトボイスの結果

フォトボイスの結果、学生は、地域医療とは何か、患者と医療者との関係性のあり方とはどのようなものかという医療の本質を問うような発見をし、自らが医療者となるうえで必要となる医療への強い思いを喚起することができた。これらは医療現場を実際に見ることにより自分自身で感じ取ったものであり、医療の専門家との対話を通じて得られたものでもある。以下では、学生が学びとったものを「標準化されない思考」と「環境のなかの思考」というフォトボイスの2つの思考の枠組みにおいて考察する。この2つの思考の枠組みは互いに関係しあって成り立つものであるが、ここではひとまずそれぞれに分けて考えていく。

まず、「標準化されない思考」を端的に示したのは助産師を担当したグループAの結果である。このグループは、助産師の仕事のなかには「安らぎのひとつとき」があると結論した(写真1)。この写真は、NICU(新生児集中治療室)という重症の新生児・未熟児を治療する緊迫した場においても、「食べる」という人間の基本的な生活体験を提供しようとする助産師に「安らぎ」を感じた場面である。看護

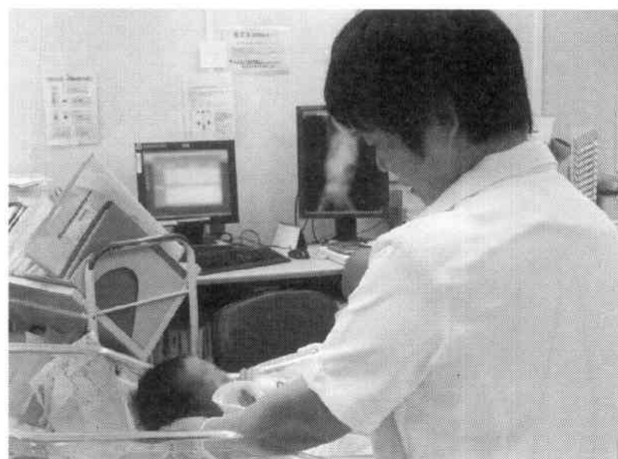


写真1 「安らぎのひとつとき」グループAフォトボイス結果報告会資料より抜粋

の職務は、対象となる人がいかなる状態にあろうともその生活過程を円滑に行えるよう支援することであるが、学生は、このような看護の専門性を直感でつかみ取っている。学生は「助産師を理解する」という課題に対し、助産師へのインタビューや保健師助産師看護師法に関する書物から、助産師の職務内容や役割を事前に学んでいる。しかし、学生はその学びを「観察のフレームワーク」とするのではなく、自分たちの主体性と感性（現象を的確に捉える力）を最大限働かせ、助産師と赤ん坊とのやりとりに着目した。つまり、法律で定められた標準化された枠組みにしばられない自由な視点から「安らぎのひとつ」という看護の本質を見出している。

「標準化されない思考」は、一般の認識を問い直すことから生まれる。医師を担当したグループBは、医師に対する世間一般のイメージに疑問を持ち、医師という職務を正しく理解することを目的に探究活動を行った。学生は、外科医から「外科の本質は考えることだ」と言われ、内科医からは「患者の全体を見ることだ」と言われた。医療現場では、総合診療科の医師が白衣を着ていないこと、医師自らが椅子から立ち上がり患者を呼びに行く様子、さらには医師が患者の手を握りながら脈を測る様子（写真2）などを写真に収めた。そして、医師の仕事を支えているのは「患者とのコミュニケーション」であり、それは単に言葉を通じて理解しあうのではなく、「人としてつながっていること」だと述べた。このような学生の発見は、「病気を見て患者を見ない」、「臓器を見て全体を見ない」というマスメディアを通じて流布されている医師に対する固定観念を覆すものであり、標準化されない思考を通じて得られたものである。

一方、「環境のなかの思考」を典型的に示したのは、理学療法士の仕事を調査したグループCである。このグループの結果では、ある理学療法士が歩行の訓練を行っており、患者の背後でその身体を支えるか支えないかというわずか



写真2 「握手？」グループBフォトボイス結果報告会資料より抜粋



写真3 「歩くとは生きること」グループCフォトボイス結果報告会資料より抜粋

な距離を保ち、患者の歩行を援助していた（写真3）。またある理学療法士は患者の痛む身体に治療を施しながら、とりとめのない会話をし、患者の家や間取りなど生活環境の全体を知ろうとしていた。学生は「歩くとは生きること」であり、「手で触れ、会話することにより、患者を弱者にさせない」という理学療法の理念を学び、大学病院という医療専門職が権威的になりうる場において、患者の目線に立ち、患者の尊厳を最大限尊重した医療とは何かについて考えた。Cグループの学生は「医療とは奉仕の職業である」という結論を導いたが、これは理学療法場の場を詳細に観察し、その仕事環境のなかで見出した結論である。

また、すべての学生のグループに共通していたのは、医療という場における人間の関係性をつぶさに見ようとしていたことである。それは決して治療そのものではなく、医療者と受療者との接点であり、そこにある関係性のあり方である。たとえば、看護師を担当したDグループは、看護師の「さりげない介助」に、モノではなく人を相手にしていることの本質を見出した。また、理学療法士を担当したグループEは、ことばがきちんと通じない患者に対してもアイ・コンタクトを欠かさず、話しかける理学療法士の姿にコミュニケーションの本当の意味（＝心が通じる）を知った（写真4）。これらが医療という場のなかで考える「環境のなかの思考」の成果であろう。

地域医療教育にフォトボイスを活用することの意義と課題

日本では未曾有の医学教育改革が進められており、とりわけその教育内容の精選と教育方法の改善が求められてい



写真4 「患者とのコンタクトは欠かさない…たとえ通じないと思っても」グループEフォトボイス結果報告会資料より抜粋

る。こうしたなか、地域医療教育にフォトボイスを活用することの意義は次のようにまとめられる。一つに、学生はさまざまな医療職の特殊性を学びつつも、そこに共通する医療の本質を自ら考える機会を得られることである。フォトボイスを通じて、医療の場は人と人とのつながり、すなわちパートナーシップから成り立ち⁵⁾、逆にいえばそのようなつながりが医療の根幹を成すものであることを学生は学び取っている。この学びは、医療の現場において医療の本質に接近するような体験をしてはじめて得られたものである。

二つに、文字で思考するだけでなく、視覚を含めた自分の身体感覚を通じて思考することにより、人間の健康や医療についてこれまでにない新しい知見を学生は得ることができる。三つに、フォトボイスは医療の場に密着して行われるために、その場の人びとの目線で健康・医療について考えることができる。それは医療者の視点でもあり、患者の視点でもある。地域医療教育でこのような教育を行うことは、将来、学生が地域医療に携わるようになった時に、地域の人びとの健康を医療者としての立場からだけでなく、地域の人びとの立場からも考えることができるようになることに役立つ。地域の人びととのパートナーシップの萌芽をここに見ることができる。

地域医療合同セミナーにフォトボイスを活用することの今後の課題は、成果の適切な評価と学びの継続である。フォトボイスは質的方法論の一つの手法であり、量的研究が用いる評価の基準をそのままあてはめることはできない。また、フォトボイスは結果の評価だけではなく、プロセスの評価（探究活動の過程においてどのような成果が得られたかを評価する）を必要とする⁶⁾。さらに、探求活動の個別の成果をどこまで一般化して論じるかについても留意が必要である。このような質的方法論に特有の課題を抱えながらも、フォトボイスは従来の医学教育にはない新しい教育手法としてその効果が期待され、その効果を持続させる

ためにも学生と医療者、学生と患者・地域住民との対話にもとづく継続的な学習の機会を設けることが必要である。地域医療とは病院での疾病の治療・ケアにとどまらない医療であり、2年次以降の地域医療合同セミナーにおいて病院以外のさまざまな医療の場における学びの機会が重要であろう。

謝 辞

大学附属病院におけるフォトボイスの実施にあたり、札幌医科大学医療人育成センターの相馬仁先生、明石浩史先生、佐藤利夫先生、同大学保健医療学部の中田みぎわ先生、同大学医学部地域医療総合医学講座の夏目寿彦にご尽力いただきました。本稿の執筆にあたり、同大学医療人育成センターの山田恵子先生から有益なコメントをいただきました。フォトボイスを行った学生、被写体となられた大学附属病院の職員の方々および患者さまから、写真掲載許可をいただきました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 札幌医科大学医学部・保健医療学部 文部科学省特色ある大学教育支援プログラム「学部一貫教育による地域医療マインドの形成」平成19年度報告書 2008
- 2) Wang C, Burris, M.A: Photovoice: Concept, methodology, and use for participatory needs assessment. *Health Education & Behavior*, vol. 24 (3) : 369-387, 1997
- 3) 札幌医科大学保健医療学部メディア教育センター 文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム「高大一貫型プログラムによる効果的職業教育」平成18年度取組成果報告書 2009
- 4) 道信良子: 自己省察と自己表現をうながす教育－文化人類学からの多文化医療教育の試み. *こころと文化* 7 (2) : 126-134, 2008
- 5) 澤田いずみ: 医科系大学におけるパートナーシップ力の育成に関する一考察－地域密着型チーム医療実習の実践を通して－. *生活指導研究* 26 : 40-48, 2009
- 6) 道信良子: 実践の文化人類学におけるプロセス推論－日本の医療系大学における多文化医療教育プロジェクトを事例として. *国立民族学博物館調査報告* 85 : 53-76, 2009